

## 平成 24 年度海外学生派遣事業 報告書

### 基本事項

所属：総合研究大学院大学文化科学研究科 日本文学専攻  
氏名：江崎公子  
海外派遣先国名：オランダ  
海外派遣先大学名：ライデン大学  
海外派遣先所属：Asian Studies (research)  
派遣期間：2013 年 2 月 26 日～3 月 29 日

### 海外派遣先大学について

オランダの首都アムステルダムと政治の中心地ハーグとのほぼ中間に小都市ライデンが位置する。この街を特色づけているのは 1575 年に創設されたオランダ最古の歴史を誇るライデン大学である。多くの知的エリートを育み、江戸幕府が初めて欧州に派遣した留学生、西周と津田真道もここで学んだ。

現在のライデン大学人文学科のコンセプトは、「世界の言語と文化と民族研究のインターナショナルセンター」であるという。確かに多様な国籍の学生がのびのびと勉学しており、大学院の授業は基本的に英語で行われていた。日本学科の学部では漫画とアニメに関する授業に多くの聴講生が集まり、「AKB48」の動静は学部学生の興味をさそっていた。大学院生ともなると日本の推理小説や年中行事・祭礼そして政治分析に興味を示し、日本の最新情報をもとに、それらの学生から筆者への質問等も多くあった。



(左 通学路途中のボットの風車と跳ね橋)



(右 人文学科入り口)

## 海外派遣前の準備

ライデンには長崎・出島の医師フィリップ・フォン・シーボルト（1796-1866）が蒐集した日本に関する膨大な史・資料が残されている。そのため多くの研究者によって所蔵リストや研究書が出されている。それらの先行研究の中から、筆者の研究対象である近世から近代にかけての辞書・辞典類をリストアップした。またライデン大学図書館のオンライン情報から該当する文献概要をプリントアウトし閲覧請求に備えた。オランダ語の電子辞書及び翻訳ソフトはそれほど日本製品で出回っているものではなかったので、少々取得に時間を要した。

## 海外派遣中の研究について

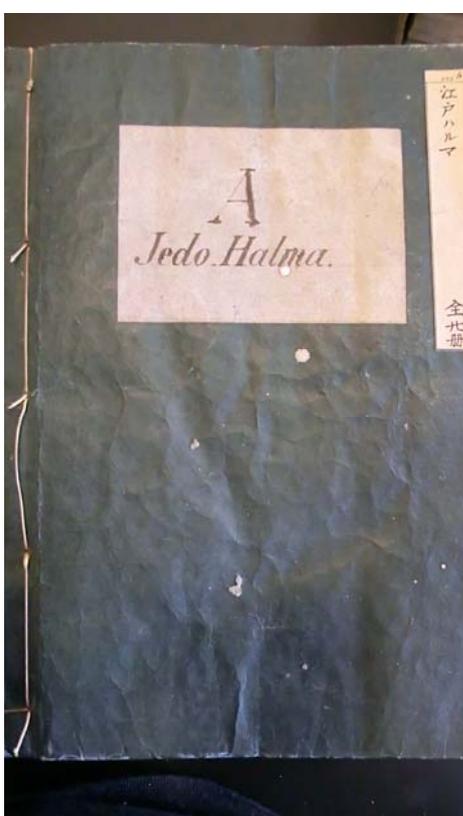
ライデン大学には各リサーチセンターの図書室と中央図書館等の数多くの図書館が点在している。またそれぞれのコレクションには担当司書がおり、配架や鍵の管理をしている。それぞれの場所に見合った方法で請求を出さなければならないため、筆者の準備したリストや文献概要のみでは資料請求することができなかった。例えば、日本学科のコレクションの場合は、担当司書にアポイントをとり、出校日に新たにコレクション番号を記したリストを提出し、閲覧可能になるまで連絡をまつ。筆者は貴重書をふくむ30点程を希望し、担当司書の計らいにより書庫内で閲覧が可能となった。この場合閲覧まで9日程を要したが、一方リストを提出しても、滞在中に閲覧が叶わなかったコレクションもある。

中央図書館に関しては特別室と雑誌検索の流れについて以下述べる。

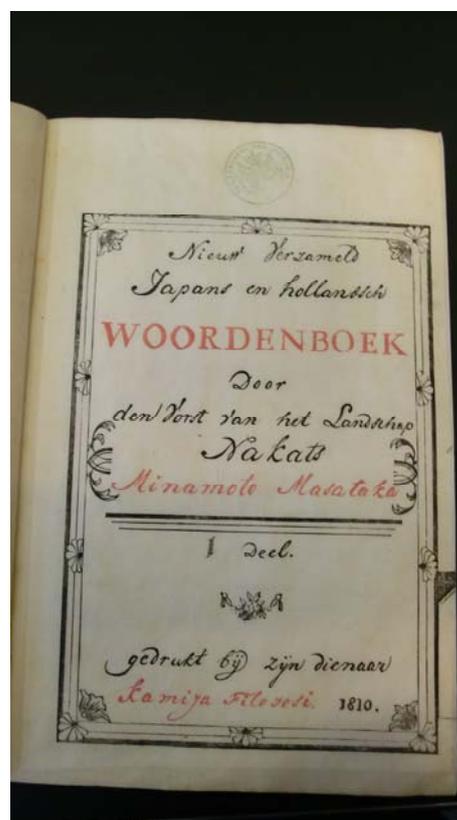
特別室は歴史的にも貴重な本や写真及び地図等を閲覧する場所で、ここの司書はマナーに大変厳しかった。インターネットで請求した本が分冊あるいは上中下や乾坤といった複数巻よりなる資料でも、1度に2組か2冊ずつしか閲覧できず、返却後次のものというルールであった。さらに枕様のクッションの上で綴じ部分に負担をかけず閲覧するのだが、つい夢中になり手にとって読んでいたところお叱りを受けた。しかし、ここで筆者の目的の一つである近世の辞書 1818年版『江戸ハルマ』、1810年版『訳鍵』、1810年版『中津辞書』、1816年版『和蘭字彙』、1822年版『バスタールド辞書』の原本を、欠落部分なしにみることができ博士論文の足固めとすることができた。

以上の各コレクションや特別室は夕方5時に閉鎖される。しかし中央図書館は、日曜日に限って昼の12時から深夜12時まで司書によるサービスは皆無であるが、学生に開放されている。そこで開架図書部分（各国の辞書や百科事典が参考図書として配置されている）とインターネットの使用が時間を気にせず使用できた。ここでは人文学科のコンセプトである世界の言語と文化と民族研究センターに相応しく、歴史的辞書としてはグリム編の出版年の違う様々な版のドイツ語辞書や、地域ごとの例えば高地ドイツ語やベルリン限定のドイツ語やライン流域言語などの各地の辞書が閲覧できた。

雑誌記事は多くがインターネット検索の結果、オンライン上で閲覧できた。イギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、イタリアの大学でネット上に取り込まれた記事は無料で、また 1882 年に雑誌掲載された書評などは有料だが J S T O R 経由で読むことができた。プリントアウトのさいにはダウンロードした日時と J S T O R の文字が各頁に印字されている。但しこのダウンロードとプリントアウトはライデン大学内の端末でしかできない。雑誌記事検索のなかで日本の近代の語彙についての海外の研究者の論文にも出会えた。宝の山に遭遇したような興奮を覚えた。その結果、約 1000 枚の紙コピーと 1700 枚のデジタルカメラのフィルム撮影となった。これらの資料は論文に有効的に活かすことができると確信している。



(左 『江戸ハルマ』の表紙)



(右 『中津辞書』の扉)

This content downloaded from 132.229.187.106 on Wed, 27 Mar 2013 12:22:46 PM  
 All use subject to JSTOR Terms and Conditions

、(下 雑誌記事をダウンロードした時各頁に印字される文)

## 海外派遣中の研究以外の活動

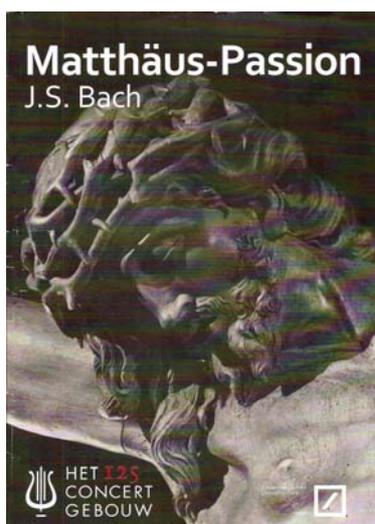
キリスト教文化圏で復活祭イースターは教会暦のなかでも重要なイベントである。滞在最後の週が丁度この時期であった。B&B から大学への通学路途中に聖ピータース教会がある。そこに聖なる金曜の前日に演奏されるバッハのマタイ受難曲ライデン市民の合唱付きの演奏会ポスターがあった。ネットで申し込むと同時にさらに調べると、その1週間前にはコンサートへボウでもバッハ協会主催アムステルダム混成管弦楽団のマタイ受難曲演奏会があることがわかった。そこで3月21日木曜日にはアムステルダムのコンサートへボウで28日木曜日にはライデンの聖ピータース教会で19時30分から23時ころまでバッハのマタイ受難曲を聴きそして合唱部分を歌ってきた。ほぼ地元年配者が多い中で、祈りにも似た合唱部分を教会で共有させて頂いたことは、歴史の流れに身を置いているような大変貴重な体験であった。



(左 アムステルダム コンセルトヘボウ演奏会場)



(右 ライデンの教会群)



(左 マタイ受難曲プログラム)



(右 ライデンの教会群)

## 海外派遣費用について

オランダは消費税率 21%と物価が非常に高い国である。到着後すぐのホテルは三つ星クラスで1泊 100 ユーロを超えていた。そこで B&B (ベッドと朝食のみの宿舎) あるいはアパートを大学経由で紹介してもらった。アパートも併設している 1645 年設立の B&B に 1泊 60 ユーロで契約し、自炊をした。パンやチーズ等の基本的食品は安く抑えられ (消費税率 6%)、外食をしなければお金がかからないこともわかった。また時期的に観光シーズンから外れていたため、飛行機も格安チケットを手に入れることができた。ただし、石畳を毎日歩き靴の踵がボロボロになったため、足に合う靴を購入しようとしたが高かった。結果、概算額で支給された金額に対して 4 万円程返金することになった。

## 語学状況

ライデンの街全体でコミュニケーションは英語で可能である。また、日本学科では日本語を話せる学生、司書、教員が多いため、日本語で 1 日過ぎてしまった日もあった。日常生活のなかでオランダ語の冊子体辞書はほとんど使うことがなかった。

## 海外派遣先で困ったこと

1645 年来のアパートは屋根に当たる板張りの隙間から埃が舞い降りてくる。電気プラグあるいはコンセントに何らかの欠陥があったようで、日本から持参した電圧変換器に異変が生じ、煙を出してショートしてしまった。B&B 全体のヒューズも飛び、大家がすぐさま駆けつけた。パソコンや携帯電話などの充電がその後しばらくできず、不自由と迷惑をかけた。また、今年は 100 年に 1 度といわれる寒気におそわれ、アパート室内でも氷点下となるため、持参した厚手のものを幾重にも着こんで寝ていた夜もあった。

## 海外派遣を希望する後輩へのアドバイス

日本文学研究であっても、日本国内の所蔵先で調査研究が事足りるわけではない。たとえば、一つの所蔵館にある資料でも完本でなければ欠本部分を他館の資料で補わなければならない。ましてや国内に所蔵がなく海外のコレクションを閲覧しなければならないケースも少なくない。資料の保存状態も、場合によっては海外のものが優れており、諸本調査は極めて重要な意味をもってくるだろう。さらに近年デジタル化が進み、原資料に触れられなくなっている。直接自分の目で実物の典籍や史資料とむきあえるのであれば、海外の資料をもっと有効に活用すべきであろう。デジタル媒体や活字化された資料からは窺いづらい造本や印刷技術の精緻さ、筆写資料の筆致や筆勢から読み取れる想いや戸惑い、それら様々な情報は原本資料であるが故に直接的なメッセージとして読む者に伝わってくる。また、海外の研究者による日本文学に関する研究で、日本語以外で書かれた文献の視点もすばらしいものがあると実感し、日本文学のグローバル化のためにも資料検索の幅を広げる必要性を感じた。

最後にこのような機会を与えてくださった総研大の関係各位に心から感謝いたします。  
また身元引き受けの労をおとりいただいたライデン大学日本学科の Profssor Ivo Smits  
そして司書の Nadia Kreeft さんに厚くお礼申し上げます。